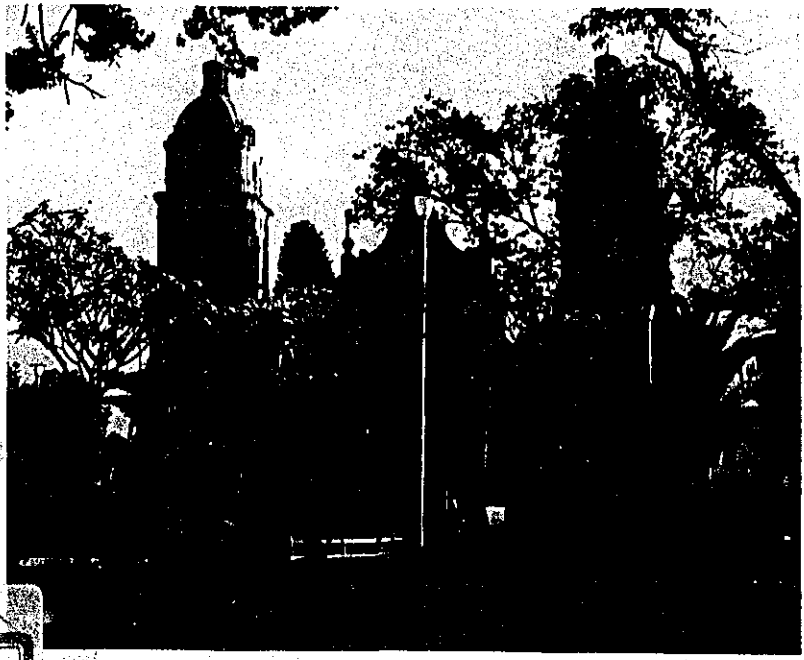
パラグァイとボリビア

PARAGUAY Y BOLIVIA



JICA
701
234
PL
LIBRARY

海外移住事業団

国際協力事業団

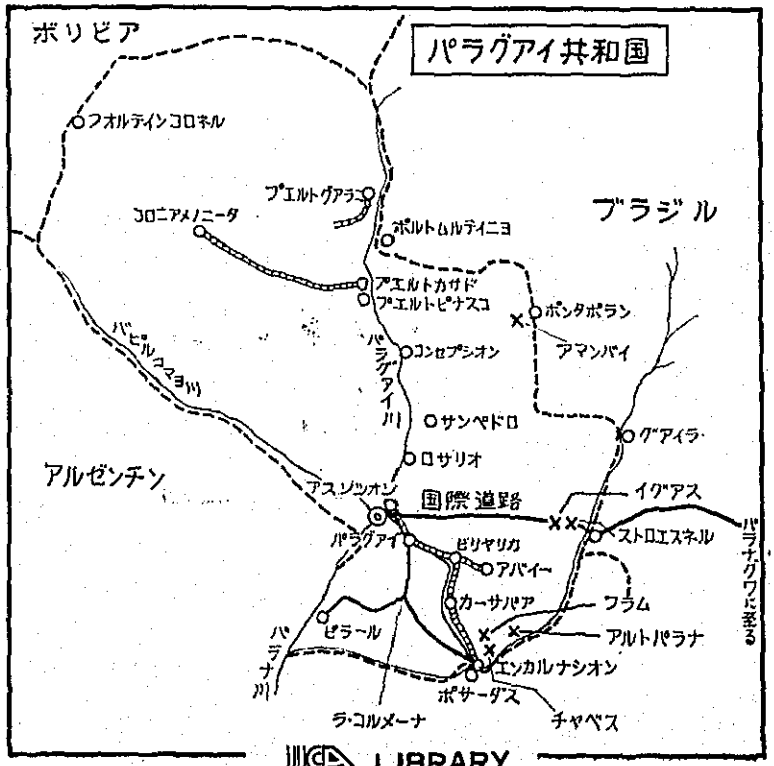
受入月日 '84. 8. 21	708
	234
登録No. 13331	EM

3. パラグアイ

国名と国旗

国名の起こりは、土人語で「鳥毛製のかんむり」の意味だというのと、土人が「シュロの花咲く花輪の水」という意味で、パラグアイ川を「パラグアイ・イー」とよんでいたことによるという説がある。国旗は横3段に等分して、上から赤、白、青の3色旗。

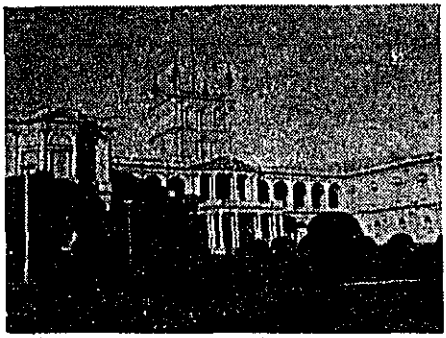
中段白色は平和を青色は秩序をあらわしている。国章の部分は表裏異なっており、表が正式のの国章、裏は国庫を表現している。



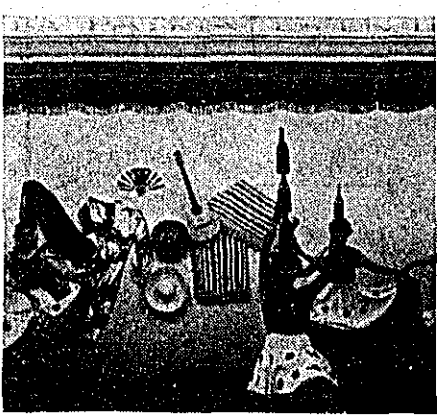
JICA LIBRARY
1028828[0]

自　然　南米大陸のほぼ中央に位し、海のない内陸国で、面積は約40万7,000km²でわが国よりもやや広い。国の中央を縦貫するパラグアイ川によって、東部と西部に大きくわかれている。東部パラグアイは、国土の約40%を占め、森林の多い丘陵地帯と平原がひろがり、ゆるい波状形をつくっている。残りの約60%を占める西部パラグアイは、チャコ地方と呼ばれ、ボリビアと国境を接する北西部から、ピルコマージョ川にかけて、ゆるやかな平原を形成しているが湿地帯が多く雨量も少なく農耕には不適である。

気候は亜熱帯性で、季節は夏と冬で、そのあいだに短い春と秋がある。夏は11月から3月までの5か月で、平均気温は31.5度であるが、最高気温は42度をこすこともある。冬は6月から8月までの3か月で、平均気温は14.5度であるが、チャコ中央部や東部パラグアイの一部では、降霜を見ることもある。



パラグアイ国の大統領府政庁



パラグアイの民族踊り

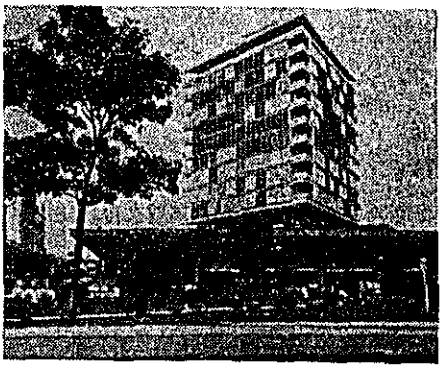
気温の変化が激しく、特に春と秋には、1日の気温差が20度前後に及ぶことも珍しくない。年間平均雨量は、約1,500㎜で東部パラグアイは多いが、チャコ地方では少ない。

住　民　1969年の推定人口は、231万4,000人で、年間増加率は3.4%である。全人口の約96%が東部パラグアイに居住し、残りの約4%、10万人足らずが、国土の60%を占める広大なチャコ地方に散在している。人種

的には、スペイン人と原住民グァラニー族の混血が96.5%を占め、一つの定型化したパラグアイ人ができているのが特徴である。このほかに比較的新しく移住してきたドイツ人、フランス人、ウクライナ人やアジア人が2%、原始生活のままでいるインディオが1.5%である。国語はスペイン語とグァラニー語で、大部分の住民はグァラニー語を話し、地方へ行けばグァラニー語でなければ通じないところもある。この国は20世紀にはいってから、外国人移住を奨励し、1918年から1968年までに受け入れたのは約56,000人でポーランド人がもっとも多く、次いで日本人、ドイツ人やメノニタ教徒が多い。

パラグアイへの入移住者数
(1918～1968年)

国　　名	移住者数
ポーランド	14,828人
日　　本	7,433人
メノニタ教徒	6,152人
アルゼンチン	5,685人
ド　イ　ツ	5,306人
ブ　ラ　ジ　ル	2,395人
そ　の　他	14,146人
計	55,945人



首都アスンシオンにある　グアラニーホテル

主要都市

アスンシオン市

人口36万、1937年8月15日スペイン人によってパラグアイ川東岸の入り江に面して建設された首都。亜熱帯性の植物が茂る緑の濃い美しいスペイン風の都市である。日本の大使館がある。

エンカルナシオン市

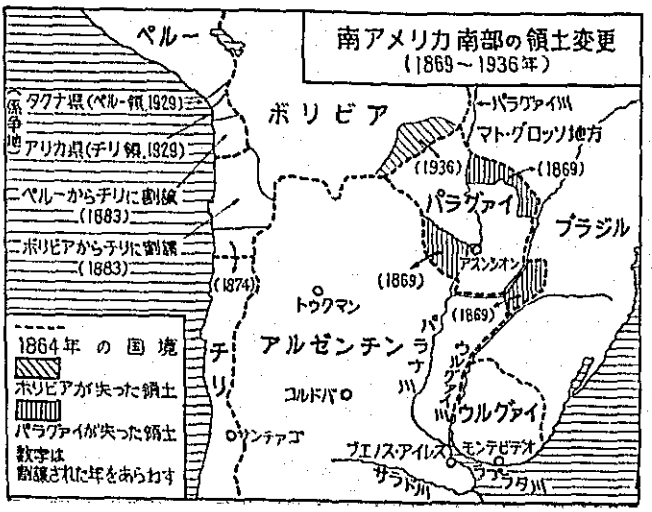
人口35,000。パラナ川に面し、アルゼンチンのポーサーダス市に対している。イタプア地方の大豆、とうもろこし、マテ茶、油桐(あぶらぎり)などの農産物や木材の集散地である。

現代への歩み

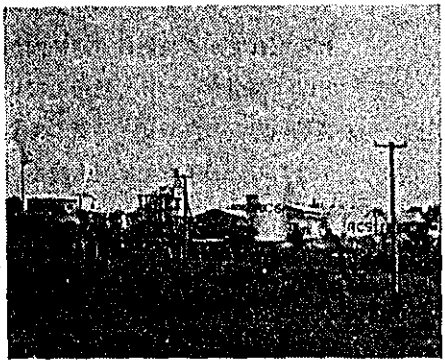
16世紀のはじめ、スペイン人の植民がはじまる前まで、パラグアイは、インディオの一種族であるグァラニー族が、血族中心の小集落をつくり原始的な農耕と狩猟、漁撈で生活していた。

1524年ポルトガル人探検隊が、金、銀を求めてブラジルからアスンシオンを経て、ボリビア、ペルー東部地方に侵入し、その帰途原住民の襲撃にあい、ほとんど全滅した。これがヨーロッパ人がパラグアイにはいった最初といわれている。その後、ラプラタ川(上流はパラグアイ川)奥地に白人王がおさめる金銀の国があるといううわさによってヨーロッパ人の探検熱が高まり、スペイン人による征服が組織的に開始され、1537年8月15日アスンシオンに砦が建設され、植民がはじまった。1580年ブエノスアイレスに総督府が移されるまでアスンシオンはラプラタ征服の拠点として、今日のパラグアイのほかボリビア、アルゼンチンおよびブラジルの一部を支配していた。1560年と1617年に現在のボリビアとアルゼンチンに分離され、パラグアイは大西洋への出口を失い内陸国となった。

スペインの政治支配や貿易独占に不満をつのらせていた植民者たちは、1810年のブエノスアイレス革命に刺激され、1811年5月14日革命運動をおこし、翌15日独立を宣言した。1814年から27年間執政のフランシア博士は、独裁体制の



パラグアイ国アルトパラナ移住地
診療所と医師看護婦



エンカルナシオンのイタプア搾油会社全景

下に鎖国政策をとり、内外国人の出入を禁止し、外交関係を拒否し、内政では一部の宗教家、学者を迫害し、教育の制限なども行なった。このことは、反面、パラグアイが外国の隷属下にはいるのを防ぎ国内開発の基礎をかため、パラグアイ人の連帯意識を強めることにもなった。フランシアの死後、1844年共和国憲法が制定され、カルロスアントニオロペスが初代大統領に就任し、19年にわたり政治を担当した。

彼は外国から技術者、学者を招き、義務教育を実施し、農工業を奨励し、南米では最初の鉄道を建設するなど、国力の伸長に努力した。ついで2代目大統領として父のあとを継いだフランシスコ=ソロマノ=ロペスは、かねて国境問題でブラジル、アルゼンチンのあいだに争いがあったが、1864年ウルグアイ内紛への介入を契機として、ブラジル、アルゼンチン、ウルグアイの3国を相手に5か年にわたる戦争（三国戦争）を行なった。この戦争は1870年3月1日大統領の戦死によりおわったが、パラグアイは国富を使いはたしたばかりか、領土を削られ、男子の約半数を失った。1870年新憲法が制定され、政党が結成されたが、政情は安定せず、1916年までの46年間に22人の大統領の更迭があり、混乱がつづいた。このあいだ代々の政府は人口対策の一つとして外国移民を歓迎した。

パラグアイ国　イグアスー移住地
畜産センターでの放牧風景

また、1932年には国境問題からボリビアとのあいだにチャコ戦争がおこり、3年間の死闘ののち、双方とも精根つきはて、1935年6月米国、アルゼンチン、ブラジル、ペルー、チリ、ウルグアイの調停により休戦した。その後1947年内乱が起こり、共和党（通称赤党）が政権を握ったが、内紛がつづき1954年のクーデターでアルフレッド＝ストロエスネル将軍が大統領に選ばれてから政局は安定に向かった。南米ではもっとも親米的で、現在まで17年間引きつづいて統治している、ストロエスネル政権は、経済発展と国民福祉の向上のため1970年新しく経済社会開発5か年計画をたて推進している。すなわち1975年までに国内総生産を年間平均6％の割合で引き上げることを計画し、輸入制限、金融の引き締めによる黒字健全財政を目ざす一方、道路、通信網や発電所建設をすすめ社会資本の充実に努力している。さらに従来外国からの輸入に依存していた小麦の増産計画にも取り組み、政治の安定とともに着々とその成果をあげている。

産　業

産業は農業、牧畜、林業とこれら第1次産品を原料とする加工工業がおもなもので、国内総生産に占める農牧林業の割合は31％で、貿易面でも1969年の輸出総額5,100万ドルのうち農産物1,150万ドル（22.5％），食肉1,290万ドル（25.3％），木材1,170万ドル（22.9％）で、輸出総額の70.7％を占めている。農牧林業には、全人口の50％以上が従事しているが、農業可耕地は、国土の21.6％と推定され、1969年の農耕地は、88万2,000haで、可耕地の10％、全国土の2.2％しかまだ利用されていない。牧畜は牛が多く、553万頭（国民1人につき2.4頭）で1969年には65万500頭を屠殺（とさつ）し、輸出用に30％、内需要用に70％が向けられた。また1969年の輸入総額は8,200万ドルで小麦、機

械類がおもなもので輸入超過となっている。

パラグアイの森林面積は、国土の59%を占めているが、植林によるものは少なく、天然の森林から有用材を採取している。木材の国内需要は少なく、燃料用を除き用材の大部分は、主としてアルゼンチンに輸出されている。

文　化　教育に力をいれており、最近の文盲率は28%で、小学校は、6年制義務教育であるが、地方では二部制授業も多い。大学は2校だけで大学生数は約7,000人である。信仰の自由は認められているが、国民の85%はカトリック教徒で、大統領はカトリック教徒であることが憲法で定められている。

スポーツは、サッカーが盛んである。文化面はラテン文化と土着のグワラニー文化が混合しており、インディアン、ハープを使用したパラグアイ音楽は素朴であるが世界的に有名である。

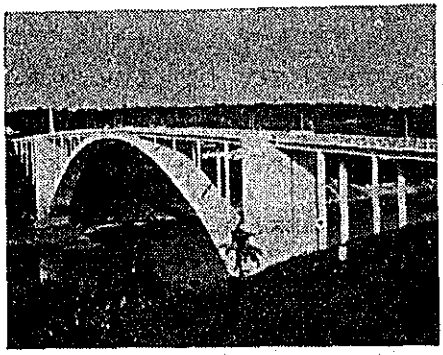
パラグアイ国　フラム中学校舎と授業風景
（在学生の大部分は日系人）

日本との関係　日本との関係で、もっとも重要なものは移住で、現在日系人は約7,200人（うち日本国籍者6,800人）である。

パラグアイへの日本人集団移住は、1934年ブラジルで外国人移住制限法が制定され、ブラジルへの移住が制限されたことがきっかけとなった。当時日本人の入国に開放的な態度をとっていたパラグアイ政府の許可を得て、1936年（昭和11年）アスンシオン市の東南132kmのラコルメナ移住地に入植したのがはじまりであるが、第二次世界大戦によって中絶するまで123

戸が移住した。戦後は1954年からパラグアイ南部のエンカルナシオン市に近いチャベス国営植民地への入植がはじめられ1951年までに110戸が入植した。

ついで1955年日本側ではチャベス植民地に隣接してフラム移住地（16,000 ha），1959年には、アルトパラナ移住地（83,500ha）1961年にはパラグアイとブラジルを結ぶ国際道路沿いにイグアス移住地（87,700 ha）を建設し、日本人農業移住者の受け入れを行ない、合計758戸、3,643人が移住している。また、1956年から1958年にかけてブラジルとの国境に近いペドロファンカバリェーロ市近郊のアメリカ人経営のコーヒー園に雇用労働者として137戸が入植したが、現在はそれぞれ独立してコーヒー園などを経営している。



パラグアイ国　友情の大橋

アルトパラナ移住地10周年記念式典でにぎわう日系人（右の建物が乾繭工場）

1959年7月日本とパラグアイのあいだに移住協定が結ばれ、30年間に85,000人の日本人移住者の入国が認められている。

日本人のパラグアイ移住の歴史はまだ日が浅いが、その勤勉さと技術によって着実に生活の基礎をきずいている。エンカルナシオン市周辺の日系3入植地（チャベス、フラム、アルトパラナ）では、1969年にはパラグアイ大豆生産量22,000トンのうち10,000トンを生産し、また、パラグアイ国全体の油桐畑28,000haのうち、7,000haを所有している。1969年以来養蚕事業を導入し、将来の輸出産業のホープとしてパラグアイ側からも注目されている。また、

イグアスやラコルメナ移住地のトマトやそのほかの野菜類、アマンパイのコーヒーは首都アスシオン市の需要をみたしている。

1970年以来日本からの進出企業としてエンカルナシオン市には、近代設備を誇る製油工場、アルトパラナ移住地には、乾繭工場が操業しており、またイグアス移住地には近代的牧場経営（約1万ha）を目ざしたイグアス農牧株式会社が日本から進出している。おもな移住地には、日本人を中心とする自治会が、明るい豊かな地域社会づくりに努力しており、また日系の農業協同組合が活躍している。小学校は各移住地に建設され、パラグアイ政府の好意ですぐれた正規の教師が配置されており、フラム移住地には中学校も設けられている。

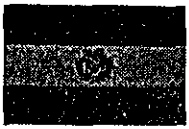
日本語教育も盛んに行なわれており、各移住地の病院には、現在日本から医師が派遣されている。

1959年10月日本から380万ドルの船舶借款がなされ、日本製の河船がパラグアイ国営商船隊の手によって運航されている。最近宇宙通信衛星中継基地やパン＝アメリカンマイクロ回線建設計画についての借款の交渉もすすめられている。

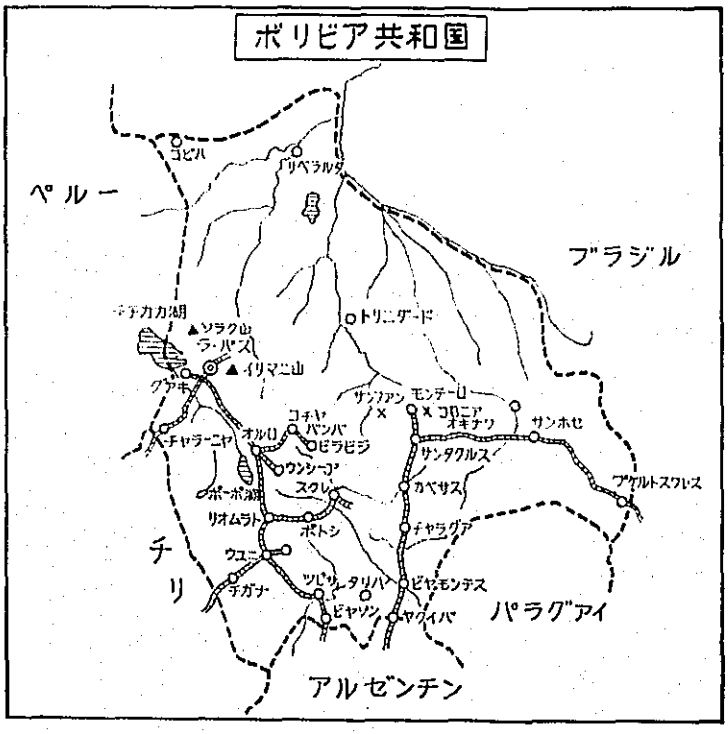
日本との貿易規模は小さく1969年の日本からの輸出は繊維、機械類など648万ドルで、輸入はわずか164万ドルで日本側の一方的な輸出超過である。

4. ボリビア

国名と国旗



南アメリカの解放に力を尽くし、建国に貢献したシモン=ボリバル将軍の姓をとってボリビアという国名とした。国旗は長方形で上から赤・黄・緑が3等分され黄色部分の中央に国章がはいってる。赤は動物を、黄色は鉱物、また緑は植物とそれぞれ産物の豊かさを表わしている。



自然　南米大陸の中央部に位置し、パラグアイと同じ内陸国で、面積は約110万㎢で、わが国の約3倍にあたる。地勢的には次の三つの地

域にわけられる。

(1) 山岳地帯西部を南北にアンデス山脈が走り、ペルー、チリとの国境線を形成して、海抜3,000 m以上の高原と山岳からなり、ボリビア全土の約⅓を占めている。

(2) 渓谷地帯　アンデス山脈の東傾斜面に属し、平均700mから2,500mまでの標高で渓谷と盆地で形成されている。この地帯の面積が全土の約⅙である。

(3) 東部平原地帯　この地帯は全土の約$\frac{2}{3}$の広さで平均標高は150mから750mである。ベニ、マモレなどの河川に恵まれている。

気候は、高原、山岳地帯は1年中気温は低く、雨季（12月から3月）と乾季（4月から11月）が比較的はっきりしている。一方、平原地帯の北部は年間を通じて暑さは相当きびしいが、南下するにしたがって緩和される。平原地帯は、乾季でもかなりの降雨がある。

住　民　1969年の推定人口は、480万人、人口密度は4人で、人口増加率は年2.4%である。人種構成は、白人13%、インディオ55%、混血人32%であり、インディオはインカあるいはそれ以前から住んでいる原住民の子孫で、ラパス付近には主としてアイマラ族が、コチャバンバ付近にはケチュア族が住んでいる。インディオは農業と鉱山労働に従事している者が多く、混血人（スペイン人とインディオの混血）は社会の中堅層を占め、主としてスペ

ボリビア国入移住者数（1931～45年）

国　　名	1938～1939	1940～1945
ドイツ	7,595	1,228
オーストリア	1,402	186
チェコスロバキア	1,004	262
スペイン	567	2,157
イギリス	597	1,180
イタリア	370	666
ポーランド	1,487	730
ユーゴスラビア	219	416

注　出所：レオンレオナード、沼田鞆雄訳『ボリビア土地・住民・制度』（財）農林水産生産性向上会議1963年3月刊, 64、ページから引用。

イン人の子孫である白人は主要都市で貿易や商業方面に多く従事し、いわゆる上流社会を形成している。政府は外国人移住者の受け入れについては積極的ではなく、年間約600人（1969年は900人）で少ない。外国と移住協定を結んでいるのは日本とだけである。

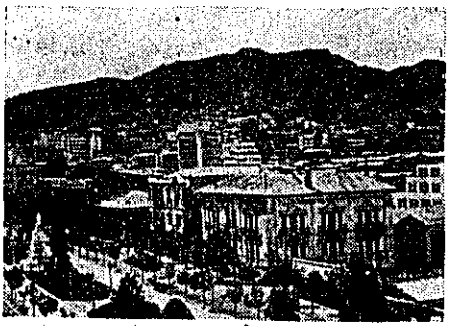
主要都市

ラパス市

人口約47万。首府ではないが、政府、国会がある。標高3,600mの高さにあり、政治、経済、文化の中心地である。わが国の大使館がある。

コチャバンバ市

人口約15万。ボリビア第2の都会で、鉄道、道路、空路の中継地である。標高2,500m、気候は年中温和で、ボリビアの軽井沢といわれる。



海抜3,600mにあるラパス市

サンタクルス市

第3の都会で人口約12万。ボリビア東部平原地帯の中心都市で農産物の集散地である。付近に日本人移住地（サンファンおよびオキナワ）がある。

スクレ市

法律上の首府であるが、最高裁判所だけしかない。人口約6万。標高2,600m

ボリビア国　サンタクルス市の中心街

現代への歩み

ボリビアは、かつては世界最大の銀の産出国であったが、その後は、すず鉱山の開発により活気づいた。しかし、硝石をめぐってチリとペルー、ボリビア連合軍のあいだで争った太平洋戦争（1881

年～1884年）と、領土と油田確保をめぐってパラグアイとのあいだに起ったチャコ戦争（1932年～1935年）との2度の大戦を経ており、特にチャコ戦争によって5万人にのぼる男子を失って国力は大いに疲弊し、その後、長いあいだインフレと革命による政治の混乱がつづいた。さらに外国資本と結託した鉱山財閥と保守反動化した政府は国民を貧困に追いやり、ついに1940年代から国民革命運動が激化するにいたった。1952年（昭和27年）4月のクーデターによりパス大統領が就任し、農地改革、鉱山の国有化、選挙法の改正を断行して新しい国土建設の基礎をつくった。

1960年（昭和35年）にふたたび大統領になったパスは（1956年から4年間はシーレス大統領）、1964年、バリエントス将軍のクーデターにより国外に追放され、バリエントスと陸軍の長老オバンドとの二頭政治（軍事政権）を経て、バリエントス（任期中飛行機事故で死亡）、シーレスオバンドへと大統領が変わった。1969年、オバンド大統領は、アメリカ系資本の石油産業の固有化を断行した。その後、1970年トーレス将軍が学生、農民、労働者および軍の支持を得て、大統領に就任し、これらの圧力により左翼政策をとっていたが、1971年8月、右派軍人によるクーデターが起り、トーレス大統領は隣国ペルーに亡命し、バンセル大佐が大統領に就任した。このようにあいつぐ政変によって政情は必ずしも安定していない。

産　業　主要産業は、鉱業と農業である。鉱業は外貨収入源としてはもっとも大きく、輸出の93%を鉱産物が占め、なかでも世界の3大生産国の一つとなっているすずは、全輸出額の55%、また、近年急速に開発された石油（原油）は14%を示している。1969年の輸出額は、1億8,000万ドルで輸入額は1億6,000万ドルとなっている。一方、農業は労働人口の吸収と国内総生産への寄与の面で重要であり、現に1968年（昭和43年）の国内総生産の23%は農牧産業が占めている。

文　化　この国の宗教は、ほかのラテンアメリカ諸国と同様、カトリックが大部分を占めているが、1932年離婚を認める法律も制定されている。国語はスペイン語である。1950年ころ68%であった文盲率は、1952年の革命後、各地に

開設された農村学校と成人教育によって改善されつつある。1968年の政府の文教予算は、全体の19%で、第1位（国防予算は15%）であり、この点からも教育に対する政府の力の入れ方がうかがえる。義務教育は8年制（小学校5年、中学校3年）、高等学校4年制、大学は5年制（ただし医科、工科は7年制）である。大学は全国で7校でいずれも国立である。

日本との関係

1907年（明治40年）に正式に外交関係が開かれてから、ボリビアは在日外交機関をおいていたが、わが国がラパスに公館を開設したのは1952年、すなわち、ボリビアが対日平和条約に調印してからである。対日貿易は、1966年において往復2,100万ドルで、わが国の大幅輸出超過(1,000万ドル）である。

大型のコンバインによる米の収穫（サンファン移住地）

現在、在留日系人は約11,000人（うち日本国籍者4,300人）を数えている。そのうち明治34年ころペルーからアンデスの山々をこえて入国した戦前の日本人およびその子孫の大部分は商業を営み、あるいは政府の役人として各方面に活躍しているが、戦後の移住者約4,000人の大半は農業に従事している。

1956年（昭和31年）8年2日、わが国とボリビアとの間に移住協定が締結され、5年間に1,000家族または6,000人の入国が認められ、さらにそれが延長されて現在にいたっている。

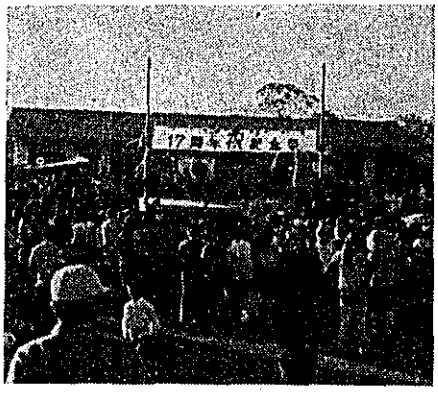
ボリビアにおける日本人移住地は、国内でもっとも農牧畜産業に適したサンタクルス州にあり、州都サンタクルス市の北西約に130㎞にサンファン移住地（27,000ha)、北東約90㎞にオキナワ移住地（54,000ha）が創設され、いずれもボリビア政府が国有地を払い下げたもので、移住者1戸当たり50haが無償与えられている。

ボリビア国　サンファン移住地内の小学校全景と授業風景(下)

1971年（昭和46）3月現在、サンファン移住地には332戸1,311人、オキナワ移住地には361戸2,337人が居住し、それぞれ営農に励んでいるが、両移住地の主作物である米の生産は、旧来の焼畑農業から大型機械化農法へ転換され生産も順調に伸びており、その生産量は国内総生産量の約1/6を占めるまでになっている。もともとボリビアは米の輸入国であったが、日本人移住者を迎えてからは国内需要をまかなうとともに一部隣接国へ輸出するまでになり、戦後日本人移住者の果たした役割は大きい。

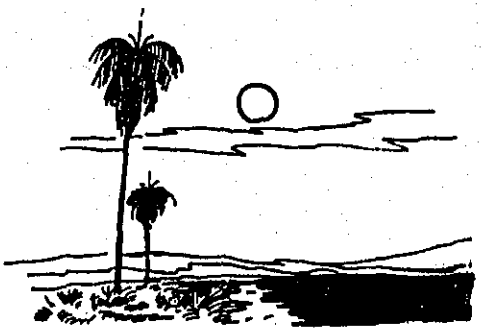
さらに両移住地とも機械化耕地の拡大と並行して肉牛の導入が急速にすすみ、両移住地合わせて6,000頭を保有している。移住地ごとにみると、まず、サンファン移住地では、大豆、とうもろこしなどの短期作物に加え、良質の柑橘類の栽培ならびに養鶏が盛んに行なわれている。

一方、オキナワ移住地では、サンファン同様、大豆、とうもろこしのほか製



沖縄第1移住地入植17周年記念祭の演芸風景

糖工場に近い立地条件を生かしてさとうきびの栽培で成果をあげており、また、養豚も盛んである。

また、この移住地は営農の多角化をはかるとともに雨量が少ない気象条件に適合する綿作を計画し1970年には250haの試作を行なったところ、好成績をあげたので、1971年から本格的栽培を開始するとともに繰綿工場の建設もはじめられ期待されている。

ボリビアはいろいろの面で後進性が強いことはいなめないが、この国の日本人は農業開発で大きな貢献を示すとともに、今後さらに各方面に進出し同国の発展に寄与するであろう。